岩手県立博物館だより

Newsletter of the Iwate Prefectural Museum
岩手県立博物館ホームページアドレス
https://www2.pref.iwate.jp/~hp0910/

2024. 9 **No. 182**

目次／企画展「捕食者の献立」**表紙**／いわて文化ノート「その後の遮光器土偶研究―第68回企画展「遮光器土偶の世界」後―」**p.2-3**／展覧会案内　企画展「捕食者の献立」**p.4-5**／事業報告「かりうちで遊んでみよう！」／事業報告「県博バックヤードツアー」**p.6**／事業報告「中学生　職場体験」／展示替えのご案内「中世南部氏関係資料レプリカ制作」**p.7**／インフォメーション**p.8**

企画展
「捕食者の献立」

令和６年９月28日（土）～12月１日（日）

山地のイヌワシや里山のアカギツネ、海洋のシャチや北極のホッキョクグマ、
彼らは何を食べるかな？？

■いわて文化ノート

その後の遮光器土偶研究―第68回企画展「遮光器土偶の世界」後―

考古部門　学芸第三課長　金子昭彦

2017（平成29）年に開催した当館第68回企画展「遮光器土偶の世界」では、その時点での遮光器土偶研究の到達点を紹介し、展覧会を案内した本誌No.153は、考古学の本としては近年珍しくベストセラーとなった竹倉史人著『土偶を読む』（2021年、晶文社）でも取り上げられました（p.307）。ここでは、その後の遮光器土偶研究の進展を紹介します。

■竹倉史人著『土偶を読む』を読む。

本書は、土偶のモチーフは、生業の主体となる植物と貝類から選ばれたとするものですが、著者は考古（歴史）学者でなく人類学者です。そのためか、縄文時代後半期の三千年の土偶の歴史を横並びに取り扱ってしまって致命的なミスを犯しています。氏は、関東地方の縄文時代後期の土偶のモチーフを、椎塚（しいつか）土偶はハマグリ、星形土偶はオオツタノハ、ミミズク土偶はイタボガキとしていますが、椎塚土偶は星形土偶へ、星形土偶はミミズク土偶へと、数百年という長い歴史の中で徐々に変化した一系統のもので、出世魚のように変化のそれぞれの段階を別々の名前で呼んでいるだけなのです。それなのに、それぞれに別のモチーフを当ててしまっているわけです。

遮光器土偶のモチーフはサトイモで、東北地方という寒冷地で南方産の作物を栽培せざるを得なかった縄文人が、低温に弱い種芋が腐らないようにと守護神として作ったのが遮光器土偶だと主張するのですが、東北地方でサトイモ栽培が生業の主体となった証拠は全くありませんし、狩猟採集民である縄文人が、こんな不合理な選択をすることはありえないでしょう。遮光器土偶の手足からサトイモを連想した竹倉氏に無理やりこじつけられてしまったのです。

以下は筆者の研究で、最初に、縄文土偶全般に関わる研究を紹介します。

■縄文土偶の造形焦点系統論

“造形焦点”とは、造形上最も力を入れていると考えられる場所で、用途に関わる可能性があり、筆者が仮に命名したものです。パッと見たときに印象に残る部位で判断します。人形の造形焦点なんて似たり寄ったりとお思いでしょうが、弥生時代以前の人形には、それぞれの時代に特徴的な造形焦点があります。

全身の分かる縄文土偶を通覧した結果、縄文土偶の造形焦点は、胸～腕とわかりました。縄文土偶出現時（縄文時代草創期後半）の二点から消滅時（弥生時代後期）の一点まで、ほぼ一貫してそうした土偶です。国宝の「縄文時代のビーナス」や「縄文の女神」等の中期の土偶など、腰～脚に焦点が付け加えられる時期もありますが、あくまで“付加焦点”であって、そうした時期でも意外に胸～腕の印象は強く、伝統が継続しているとうかがわれます。遮光器土偶も同様で、目に付加焦点が加わっていますが、あくまで主体は胸～腕にあります（図４）。

縄文時代の造形焦点が胸～腕にあるという点は、旧石器時代のビーナスと比較すると明確になります。旧石器時代のビーナスの造形焦点は複合していて、①全身、②下半身、③乳房で、このうち①が最も重視され、ヨーロッパからシベリアまで共通しますが、②はヨーロッパに顕著で、シベリアではあまり重視されません。こうした傾向は、日本でも、草創期前半の線刻礫までは踏襲されていますが、その後の草創期後半の土偶になると③しか見られなくなります。

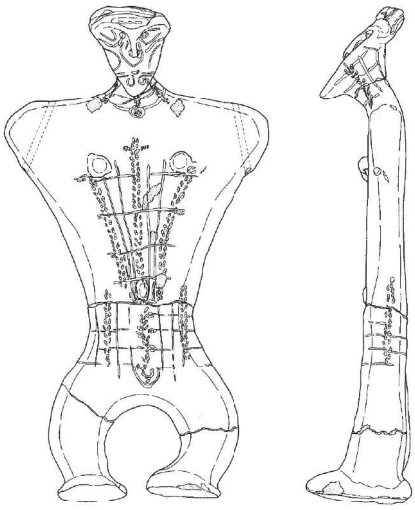


図１　青森県有戸鳥井平（ありとりいたい）（４）遺跡の土偶
（野辺地町文化財調査報告書第７集）

縄文時代の造形焦点が胸～腕にあるという視点により、女性像なのに胴が逆三角形の土偶（造形焦点を強調した結果）（図１）、思い出したように現れる胸だけの土偶や首のない土偶（不可欠な場所だけ造形。先祖帰り）などの不思議な縄文土偶を理解できるようになります。

■縄文土偶の造形基本構造

縄文土偶は、最初から最後までその地方で継続して存在するわけではなく、幾つかの断絶を経ています。それなのに、造形焦点は一貫しているということは、歴史的な伝統というよりも縄文土偶の機能として不可欠であった可能性が高いと思われます。

胸～腕という造形焦点に、片手で持てる大きさ、背面が平らで原則自立できないというつくりを合わせて、縄文土偶の造形基本構造と呼ぶことにしました。

以上の他に、縄文土偶の特徴として、性的魅力を示さない女性像、バラバラの破片で出土するのが普通だが、完全な形で見つかることもある、通常土器や石器など生活廃棄物と共に捨て場から出土し、墓から発見されるのは稀である点などが挙げられます。

■亀ヶ岡式的な土偶の広がり

亀ヶ岡式の土偶は、主に東北地方北部に見られますが、時折この範囲を超え、

大型遮光器系土偶は遠く神戸市まで見られることは展覧会でも紹介しました。当時は、大型遮光器土偶が優品で魅力的だから真似されると思っていましたが、元青森県立郷土館の鈴木克彦氏が『季刊考古学・別冊25 「亀ヶ岡文化」論の再構築』（2018年、雄山閣）で述べているとおり、「信仰遺物は人々の拠り所である反面、信仰感が異なると無意味に等しい」（p.106）ので、移民が持って行ったと考えた方が無難でしょう。移民およびその子孫が使い続けているということです。

ただし、関東地方の場合は別の様相も見られます。他地方に比べて多数の大型遮光器系土偶が出土しているのですが、その多くは、関東地方で本来使われていたミミズク土偶のイメージで作られているのです。そのため、本来の大型遮光器土偶と異なって、頭身が少なく寸詰まりで、首がなく、腕脚が細くて0脚、後頭部に本来ない突起を持つものが多いのです（図３）。図３が、その大型遮光器系土偶、図２がミミズク土偶、図４が本来の大型遮光器土偶です。おそらく、地元の人がミミズク土偶の代わりに遮光器土偶を作ったので、こうした現象が起きたのだと思います。

しかし、こうした現象は特異であり、他の地方では、亀ヶ岡式的な土偶は僅かで、関東地方でも、大型遮光器系土偶以外の亀ヶ岡式的な土偶は僅かであり、やはり移民およびその子孫という限られた人々が使っていたのだと思われます。

縄文時代というと専門家はやたら「定住」を強調しますが、私たちがイメージしがちな明治時代以降の「定住」とは、かなり異なっています。農業以前の、自然にあるものを利用する狩猟採集社会では、長くその場にとどまるほど資源の枯渇を招き、良いことはありません。糞尿など衛生環境上も同様です。「定住」と言っても、せいぜい十数年の滞在で、むしろ積極的に移住していたと考えられます。

遺跡から出土する黒曜石の産地を調べると、近隣が多いですが、必ず幾つかの産地に分かれ、中には何百㎞も離れた産地のものも、さほど珍しいことではありません。産地ごとの特長がそれほど変わるわけではないのに、こうしたことが起こるのは、黒曜石を取り寄せているのではなく、いろいろな産地の黒曜石を持っていた人々が集まって村を作っていた可能性が高いでしょう。

■大型遮光器土偶の用途

展覧会では、東京大学名誉教授今村啓爾氏の、土偶の盛衰は植物資源の豊かさと繁栄に相関しているという指摘に基づいて、大型遮光器土偶の後頭部に特徴的に見られる摩滅痕を持ち歩いた結果と解釈し、大型遮光器土偶は森の中を歩く女性のお守りという仮説を示しました。

しかし、これだと、その後明らかになった、造形焦点を胸～腕にこだわる理由が説明できません。胸が重要ということで、無事育ちますようにという育児祈願が想定されます。乳幼児の死亡率の高さは日本でもつい70年前まで変わらなかったので、当時も需要は確実にあったでしょう。問題は、なぜ縄文時代になってから盛んになったのかということですが、それは気候の温暖化で植物質食料が重要になり、その生業を主に担った女性の発言力が増したためと考えたいと思います。今村氏の指摘は、直接の因果関係ではなく、社会背景としてとらえられます。

育児祈願は、豊饒祈願につながる妊娠祈願や安産祈願と重なる部分もありますが、母親としては、生まれた子が無事育つ方が重要だったのでしょう。縄文土偶が性的魅力のない女性像であることは、こうした使い方にふさわしいと思います。持ち歩くのにふさわしい特徴や痕跡が見られる点が謎として残ります。現時点で説得力のある解釈は出せませんが、祈願の形態として肌身離さず持ち歩くことが重要だったと仮定し、上述のように縄文時代は移動の多い社会であったためとしておきたいと思います。

※高さ：図１は32.7㎝、図２は14.5㎝、図３は15.8㎝、図４は28.6㎝。

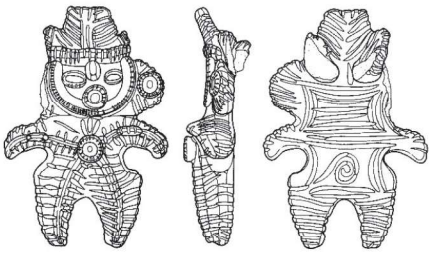


図２　茨城県前田村遺跡の土偶
（茨城県教育財団文化財調査報告第146集）

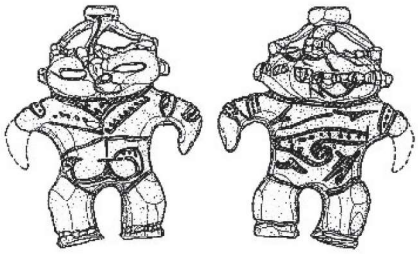


図３　茨城県小山台貝塚の土偶
（永松実1976『小山台貝塚』国書刊行会）

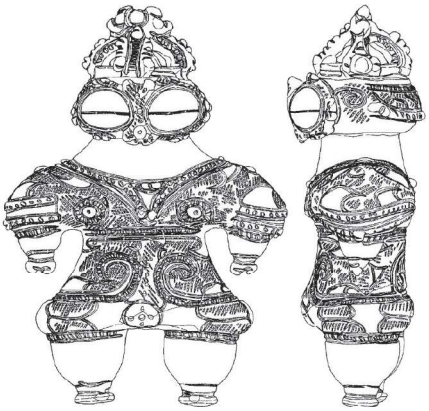


図４　岩手県二子（ふたご）貝塚の土偶
（佐々木和久1984『九戸文化』第１号論文）

■令和６年度企画展

捕食者の献立

会期：令和６年９月28日（土）～12月１日（日）

はじめに

大草原を駆けるライオンやオオカミ、大空から急襲するワシやフクロウ、水辺に潜むワニやアナコンダ、海洋に君臨するシャチやホホジロザメなど、大型の捕食者は人気の高い野生動物です。岩手県でも、山地にはツキノワグマやイヌワシ、里山にはアカギツネやフクロウ、沖合にはアホウドリやマッコウクジラなど、様々な捕食者が生息しています。生態系の頂点に君臨する彼らは、個体数が元から少なく、出会う機会はあまりありません。しかも、多くが人間活動の影響で数を減らし、絶滅の危機に瀕しています。

オオカミ

彼ら捕食者の実際の暮らしを、皆さんはどのくらいご存じでしょうか。肉や魚を食べることは分かっていても、種ごとに大きく違うことはほとんど知られていないと思います。彼らの生態はその食事内容に端的に表れており、それを見比べるだけでも、彼らの多様性を感じることができるはずです。

本企画展では、主に岩手県に生息する大型の捕食者を分類群や生態・生息環境を基に６つのグループ（肉食獣、猛禽類、フクロウ類、ヘビ類、海鳥、鯨類・鮫類）に分け、それぞれの代表的な種類と食事内容を、豊富な標本資料で紹介します。県内には生息しないオオカミ・ホッキョクグマ・シマフクロウなども加えて、その食事内容の特徴や食い分けの様子を知っていただきたいと思います。

１章　肉食獣の世界

陸上に棲む肉食性の哺乳類の多くは食肉目（ネコ目）に属し、イヌ科・ネコ科・クマ科・イタチ科などが含まれます。主に雑食性ですが種によって程度が異なり、特にネコ科は肉食性に特化し、イタチ科も肉食性が強いグループです。逆にクマ科は肉食性が弱く、ヒグマやツキノワグマも主食は植物で、アザラシ類ばかりを狩るホッキョクグマは例外的です。

ヒグマ

イイズナ（イタチ科）は食肉目の中で世界最小です。その小さな体で地中のネズミ類の巣穴に入り込んで狩りをします。日本では北海道と東北地方北部に生息しますが、東北地方の個体群は染色体数が他と異なり、日本固有の独立種である可能性があります。

イイズナ

２章　猛禽類の世界

猛禽類は主にタカ目とハヤブサ目に属するワシ・タカ・ハヤブサと呼ばれる鳥たちを指します。いずれも昼行性で、大きな翼で大空を自由に飛び、巧みな狩りで獲物を捕らえます。一見似たような外見をしていますが、種ごとに獲物が異なり、その暮らし方も様々です。

ミサゴは空中から水中へ飛び込んで魚を捕えます。ハチクマはハチの巣を探し当てて幼虫や蛹を食べ、サシバは水田でカエルやヘビを狩ります。ノスリとチュウヒは草原でネズミを捕えますが、前者は樹上から地面を眺めて待ち伏せるのに対して、後者は翼をＶ字型に開いて草原の上を舞い続けて探します。同様にオオタカとハヤブサは中型の鳥を追いかけて捕えますが、前者は林内を飛び回るのに対して、後者は障害物の無い開けた場所で、高速で一直線に突っ込みます。

ミサゴ

チゴハヤブサは、世界で最も速く飛ぶ小型の猛禽類です。小鳥や昆虫類を主に食べ、特にツバメ類やトンボ類など飛翔に長けた小動物を空中で捕えます。時には世界最速の小鳥であるアマツバメ類を狩ることもあります。また、薄暗い夕方にねぐらから飛び出すコウモリ類を待ち伏せして空中で捕えます。空中戦では、どんな小動物もチゴハヤブサには敵いません。

チゴハヤブサ

３章　フクロウ類の世界

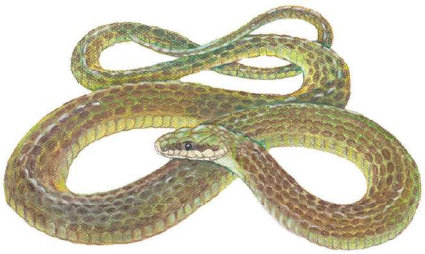
フクロウ類は夜行性で、暗闇の中でネズミ類・鳥類・昆虫類などを捕えます。翼の羽には表面に微細な突起が生えて羽音を消す役割があり、音に敏感なネズミや小鳥を捕える際に役立ちます。体の大きな種はネズミ類や鳥類を、逆に小さい種は昆虫類を多く食べています。

トラフズク

例外は北海道に生息するシマフクロウで、水辺で魚やカエルを捕食します。羽音に敏感な獲物ではないため、羽の消音機能は備わっていません。

４章　ヘビ類の世界

岩手県では陸棲８種と海棲１種のヘビ類が記録されています。前者の中で、一般的な３種（アオダイショウ・シマヘビ・ニホンマムシ）はネズミ類・鳥類・カエル類などを食べ、特にアオダイショウは木登りが得意で、小鳥の巣を襲って卵やヒナを捕食します。



アオダイショウ

残り５種は専食性が強く、限られた食物しか口にしません。ジムグリは地面の穴にもぐってネズミ類やモグラ類を、ヤマカガシは湿地でカエル類を、ヒバカリは水中のオタマジャクシや小魚を、シロマダラは森林でトカゲ類を、タカチホヘビは土中のミミズ類を捕えます。海棲１種は魚食性のエラブウミヘビで、三陸沖で稀に見られます。

シロマダラ

５章　海鳥の世界

太平洋の三陸沖は寒流と暖流が合流して豊富なプランクトンが発生し、多くの魚が集まります。それを狙って海鳥も集まり、その多くが魚やイカ類を食べます。アホウドリ類・ミズナギドリ類・カモメ類は細長い翼を使って空中から、アビ類・ウ類・ウミスズメ類・カイツブリ類は潜水して水中から狙います。その他、ウミツバメ類やヒレアシシギ類は水面上を舞って小さなプランクトンを、海ガモ類は海底へ潜って貝類や小動物を捕食します。

コアホウドリ

６章　鯨類・鮫類の世界

海中は陸上の生態系よりも長大な食物連鎖が発達し、その頂点に巨大なクジラ類やサメ類が君臨しています。クジラ類はプランクトン食のヒゲクジラ類と肉食・魚食のハクジラ類に大別され、ハクジラ類こそが真の捕食者です。

その中で世界最大の捕食者はマッコウクジラ（全長12-18m）です。大きな頭部には大量の鯨油が入っていて、それを使って深海へ長く潜り、深海棲の大型のイカ類を捕食します。特に最大種のダイオウイカをよく食べるようです。

マッコウクジラ

世界最強の捕食者はシャチ（全長５-10m）でしょう。彼らは母と娘を主軸とした母系の家族群で生活し、海域ごとに異なるグループ（エコタイプ）に分かれて、その環境に適した食性を獲得しました。例えば沿岸に定住するグループは主にサケなどの魚を、沖合に棲むグループは大型の底生魚やサメ類を、遠洋を大きく回遊するグループはクジラ類やアシカ類を襲います。

シャチ

本企画展で紹介する捕食者たちは種ごとに多様な物を食べ、多様な暮らしをしています。彼らが自由に暮らす自然豊かな地球がいつまでも保たれることを切に願います。（専門学芸調査員　髙橋雅雄）

■事業報告

よみがえった古代のボードゲーム　かりうちで遊んでみよう！（ゴールデンウィークスペシャルイベント）

開催日：令和６年５月４日（土）～６日（月）

今回の事業は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所と文化財活用センターで実施しているアウトリーチプログラム　よみがえった古代のゲーム「かりうち」で遊ぼう！　に当館から応募したところ採択されたことから、こどもの遊具などを展示したトピック展「あ・そ・ぶ」（会期：３月28日～５月19日）に合わせ、ゴールデンウィークのスペシャルイベントして実施し、家族連れを中心に約70名の方に体験いただきました。

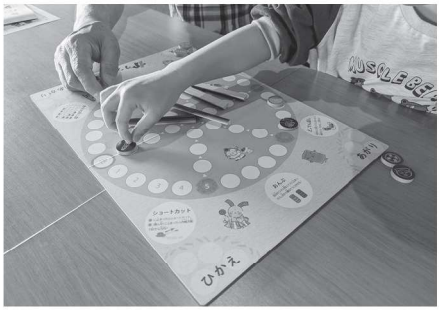
かりうちとは、すごろくのような遊びで、４つの持ち駒を、「かり」というサイコロ代わりの一面を平らにした丸い棒４本を振って、出た平らの面の数の分、盤面に従って進め、先に４つの持ち駒をすべて一周させたチームの勝ちというゲームです。平安時代の辞書『和名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）』には「加利宇知」として紹介され、流行したために古代の法律注釈書（ちゅうしゃく）『令義解（りょうのぎげ）』では禁止令が出されています。状況に応じてショートカット、駒を重ねて動かす、相手の駒を振り出しに戻す、というように、運と戦略がものをいいます。今も韓国で遊ばれているユンノリというゲームをご存知の方は、そのルールを想像していただくと分かりやすいかもしれません。

奈良県の平城京でこの盤面と思われる記号が記された土器が見つかり、調査を担当した奈良文化財研究所の研究員が類例を調べていくと、秋田城跡の磚（せん）（レンガ）や、平泉町柳之御所遺跡の折敷（おしき）（お盆）など、中央ばかりでなく、地方にもかりうちの盤面らしきものが記されたものがあることが分かりました。

参加された方からは、昔にもこのような遊びがあったことへの驚きや単純なルールながらも駆け引きの面白さなどを感じていただけました。

今後も皆様に歴史や文化を体感しながら楽しんでいただけるイベントを実施していきたいと思います。

（上席専門学芸員　戸根貴之）



かりうち体験中の様子

■事業報告

県博バックヤードツアー（2024年度「国際博物館の日」関連事業）

開催日：令和６年５月18日（土）

毎年５月18日は、ICOM（International Council of Museums；国際博物館会議）によって「国際博物館の日」と定められています。これは、博物館が社会に果たす役割を広く普及・啓発することを目的とした記念日です。

当館では国際博物館の日にあわせて毎年５月18日を無料開館日としており、関連事業として「バックヤードツアー」を開催しています。これは、普段は資料保護の観点から立ち入りを制限している博物館の収蔵庫など（バックヤード）を、特別に見学していただくためのツアーで、今年は自然コースと歴史コースの二つのコースを用意しました。

午前中の自然コースでは、生物部門と地質部門の収蔵庫の見学を行いました。

地質部門の収蔵庫の見学の様子

生物部門の収蔵庫では、動物の剥製や昆虫標本などを観察し、学芸員からこれらの資料を将来に残すことの大切さについて解説がありました。地質部門では、化石や岩石といった石に関係する資料のほか、現在の動物の骨格標本についても見学を行いました。

午後に行われた歴史コースでは、考古部門、民俗部門、歴史部門の３つの収蔵庫を順番に見学しました。考古部門の収蔵庫では遺跡から出土した土器や石器を触ってもらい、その感触や重さを体感してもらいました。民俗部門では、岩手で作られ、実際に人々に使用された生活用品や郷土芸能の衣装などの見学を行いました。最後に歴史部門では、刀や火縄銃といった歴史上の武器から、明治天皇がかつて岩手を訪れた際の行程が描かれた絵図などの観察をしました。

岩手に関する資料を保管し、後世に伝えていくことは博物館の担う大きな役割のひとつです。当館ではさまざまな資料の収集保管を行うとともに、これからも県民の皆様に岩手の「宝物」を公開する機会を作っていきたいと思います。

（専門学芸員　望月貴史）

■事業報告

中学生　職場体験

令和６年７月２日（火）～３日（水）

７月２～３日の２日間、盛岡市立下橋中学校２学年の生徒さん３名、７月３日盛岡市立松園中学校２学年の生徒さん６名が職場体験に来てくれました。博物館での「お仕事」体験をとおして、どのようなことを感じてくれたのでしょうか？

まずは、普段入ることができない博物館の裏側であるバックヤードを見学しながら、資料をどのように保管し、扱っているのかを見学してもらいました。また、東日本大震災で被災した資料の修復作業も見学し、文化財を保存修復する大切さを実感してもらいました。

次に、具体的な学芸員の仕事の一部を体験してもらいました。資料を梱包する際に必要となる資材の製作、イベント等で使用するお土産用の古銭のパッケージなど、調査研究だけでなく、資料の収集や保管、教育普及事業など学芸員の仕事が様々あることを学んでもらいました。

歴史部門では、古文書を中性紙封筒に入れ替え、資料の点数を確認する作業を行ってもらい、古文書に記されている文字を学芸員と一緒に読むことにも挑戦してもらいました。

最後は地質部門での体験です。主に収蔵庫で標本整理を行いました。化石に触れたことがないとのことで、本物の化石や鉱物標本に最初は恐る恐る触れている様子でしたが、丁寧にそして確実に標本箱に収めていく作業に真剣さが伝わってきました。

反省会では、「いい経験をした」、「今後の進路選択に活かしたい」との声が多くあがりました。中でも、様々な体験をとおして「自分の得意・不得意を考える機会になった」と話してくれた言葉が印象に残っています。進路とは自分自身を知ることから始まるのかもしれません。そのきっかけになってくれれば私たち博物館職員も嬉しく思います。中学生諸君、一緒に頑張ろう！

（主任専門学芸員　近藤良子）

説明を真剣に聞く生徒さんたち

■展示替えのご案内

中世南部氏関係資料レプリカ制作

総合展示室「いわての歩み」一部展示替えのご案内

盛岡藩主南部氏は、岩手にくらす私たちにとって、なじみの深い武家の一つです。現在の岩手県北部から青森県東部にかけて、中世のころより勢力をほこるようになったとされる南部氏ですが、実はこれまで当館の常設展示、中世のコーナーの中で、南部氏について直接伝える資料は皆無に近い状況でした。これは決して中世の南部氏が軽視されていたわけではなく、現存する中世南部氏関連資料が極めて少ないことによります。（そのため、現在ではこれだけ著名な南部氏ですが、彼らがいつ岩手県にやってきたのかさえ正確には特定できていないというのが実状です。）

しかし、近年では青森県南部町の聖寿寺館（三戸城に移る前の中世南部氏拠点）跡における発掘調査がめざましい成果を挙げており、中世の北奥の雄としての南部氏の実像が明らかにされつつあります。

そこで当館では、令和５年度に南部町教育委員会様のご協力の下、これまでに出土した代表的な中世南部氏関係資料のレプリカを制作し、令和６年度から総合展示室内で公開を開始しました。

現在確認されている中では最古の事例となる向鶴紋（上写真）は必見です。また、金箔がほどこされた土器や、かわいらしい犬型の土製品は、全国的に見ても有力大名や、室町幕府との結びつきが強い氏族の居館跡でしか出土が確認されず、室町時代における南部氏のあり方を考える上で示唆に富むものです。

この度の展示替えにより、蒲生氏郷所用と伝えられる鯰尾兜（岩手県指定文化財）は常設展示資料から外れることになりました。今後は事前にホームページ上で予告した上で、年１回程度期間限定での公開を予定しています。それまで待てないという方もどうぞご心配なく。ホームページまたは右の二次元コードからアクセスできるバーチャルツアーで鯰尾兜の見学をお楽しみ下さい。

（専門学芸調査員　目時和哉）

岩手県立博物館
IWATE PREFECTURAL MUSEUM

インフォメーション　〈令和6年9月1日～令和6年12月31日〉

お知らせ
●資料整理にともなう休館
資料整理のため、**9月1日(日)～9月10日(火)**は休館します。
●敬老の日
9月16日(月)の敬老の日は、**65歳以上の方の入館料を無料**とします。
●文化の日
11月3日(日)の文化の日は、**無料で入館**できます。

展覧会
●企画展「捕食者の献立」
令和6年9月28日(土)～12月1日(日)
会場：2階・オザワ工業ぎゃらりー(特別展示室)
オオカミやクマ類などの肉食獣、イヌワシやハヤブサなどの猛禽類、フクロウ類・海鳥類・ヘビ類、マッコウクジラやシャチなどのクジラ類に代表される大型の捕食者と、彼らの多種多様な食事内容を、豊富な実物標本や複製資料で詳しく紹介します。
◆展示解説会
① 9月28日(土)、② 9月29日(日)　各13：30～14：30
③10月12日(土)、④10月13日(日)　各15：00～16：00
当日受付、要入館料
◆文化講演会　当日受付　聴講無料　13：30～15：30
11月3日(日・祝)
「カワネズミの食べもの・カワウの食べもの」
講師：塩塚菜生氏(建設環境研究所中部支社)
本多里奈氏(埼玉県立自然の博物館)
◆日曜講座　当日受付　聴講無料　13：30～15：00
10月27日　講師：髙橋雅雄(当館学芸員)
11月10日　講師：渡辺修二(当館学芸員)
11月24日　講師：平田和彦氏(千葉県立中央博物館)
※詳細は下記「県博日曜講座」の欄をご覧ください。

県博日曜講座
第2・第4日曜日　13：30～15：00　当日受付　聴講無料
※10月13日は、博物館まつりのためお休みします。
当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。
*展覧会関連講座
9月22日　「青い目の人形―昭和2年の日米親善交流―」
川向富貴子(当館学芸員)
*10月27日　「担当学芸員の企画展解説　捕食者の献立」
髙橋雅雄(当館学芸員)
*11月10日　「虫と人のアゴはどう違う？　アゴの進化と多様性」
渡辺修二(当館学芸員)
*11月24日　「海鳥と旅する食物連鎖の世界」
平田和彦氏(千葉県立中央博物館)
12月 8日　「忘れられたパンデミック―スペイン・インフルエンザと新型コロナウイルス感染症―」
目時和哉(当館学芸員)
12月22日　「岩手の江戸時代の古文書」
大鉞地駿佑(当館学芸員)

第13回博物館まつり
令和6年10月12日(土)・13日(日)　9：30～16：00
場所：本館・屋外
「むかしあそび」や「ものづくり」など、たくさんの体験コーナーを用意しています。詳しくはHPをご覧ください。(事前予約が必要なコーナーがあります。)
例)松ぼっくりのフクロウづくり・スライムどけいづくり　ほか
むかしあそび(お手玉、わりばし鉄砲、イタドリ笛　ほか)
対象：幼児～小学生　　費用：無料

民俗講座「たいけん！むかしのくらし」
令和6年11月3日(日・祝)　全4回(所要時間30分)
①10：00～　②11：00～　③13：00～　④14：00～
昔の資料を実際に使用し、家電が普及する以前の暮らしを学ぶワークショップです。
入館料無料日　対象：幼児(4歳)～中学生とその保護者
専用メールで申込。詳細はお問い合わせください。

観察会・見学会
◆第88回地質観察会
令和6年10月26日(土)　10：00～15：10　要事前申込
場所：一関市東山町
定員：20名(小学生以上、小学生は保護者同伴)　参加費：100円
※電子メールのみの受付。詳細が決定次第、ホームページに掲載します。
◆第88回自然観察会　「捕食者を観察しよう」
令和6年10月20日(日)　10：30～12：00　要事前申込
場所：盛岡市動物公園ZOOMO
盛岡市動物公園で飼育されている捕食者(特にツキノワグマ・アカギツネ・イヌワシ・ハヤブサ等)を見学しながら、当館学芸員(髙橋)が野外での生態を、動物公園飼育員が飼育下での行動等を解説します。
※詳細が決定次第、ホームページに掲載します。

週末の催し
◆ミュージアムシアター
毎月第1土曜日　13：30～15：00頃　講堂　当日受付　視聴無料
○10月5日　サッちゃんの四角い空
(実写／90分／一般向け：岩手県舞台)
○11月2日　ホーム・スイートホーム
(実写／112分／一般向け：岩手県舞台)
○12月7日　ミッキーマウスとゆかいな仲間たち
(アニメ10分／幼児～小学生向け：フィルム映画)
サンタのいないクリスマス
(人形アニメ／45分／幼児～小学生向け：フィルム映画)
※9月はお休みします。
◆チャレンジ！はくぶつかん
小学生向け　随時受付
チャレンジ！マークをさがして はくぶつかんをたんけん！
9月14日・15日・16日・21日・22日・23日　テーマ：土(つち)
10月12日・13日・14日・19日・20日　テーマ：食(しょく)
11月 9日・10日・16日・17日　テーマ：絵(え)
12月14日・15日・21日・22日　テーマ：□(しかく)
◆たいけん教室～みんなでためそう～(事前申込制)
毎週日曜日　13：00～14：30
幼児(3歳以上で保護者同伴)・小学生10名程度

9月	9月はお休みです	11月	3日　まが玉アクセサリー 10日　ヨーヨーの絵つけ 17日　砂絵 24日　松ぼっくりのXmasツリー
10月	6日　ウォータードームづくり 20日　スライムであそぼう 27日　カラフルクモづくり	12月	1日　松ぼっくりのXmasツリー 8日　かんたん門松 15日　まゆで干支づくり(巳)★ 22日　まゆで干支づくり(巳)★

さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみましょう。
※全プログラム有料です(材料費／プログラムごと異なります)。
※予約は専用メール(一度に3名まで)で受け付け、応募多数の場合には抽選を行います。詳細は博物館ホームページをご確認ください。
★印は午前(10：00～11：30)と午後(13：00～14：30)の2回あります。

利用のご案内
■開館時間　9：30～16：30(入館は16：00まで)
■休 館 日　月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)
※年末年始(12月29日～1月3日)
※9月1日(日)～10日(火)は、資料整理のため休館します。
■入 館 料　一般330(150)円・大学生150(80)円・高校生以下無料
(　)内は20名以上の団体割引料金
※9月16日(月)敬老の日は、65歳以上の方の入館料無料。
※11月3日(日)文化の日は、入館料無料。
※岩手子育てパスポート所有者で、パスポートに記載のお子様とご一緒に来館された場合は、入館料免除となります。
※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料免除となります。
※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより
第182号
令和6年9月1日発行

編集　岩手県立博物館
〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34
Tel. (019)661-2831／Fax. (019)665-1214
発行　公益財団法人岩手県文化振興事業団
〒020-0023 盛岡市内丸13-1
Tel. (019)654-2235／Fax. (019)625-3595